

担当者として



モデレーター
上杉和央
文学部准教授

今年度の場づくりLaboでは、施設や地区単位といった小さな空間を大事にする地域づくりの実践を体感することができた。もっとも、キーパーソンの方は丹後全域やさらにその先をも念頭に置いた取り組みをしている場合も多かった。視野を広く持ちながら小さな取り組みをすることの意義を十分に理解することができたのではないと思う。

参加者からの「ある人が事業を継承したり、新規に起こしたりする際に周囲が寛容であることも大事」というコメントがあった。その場合、寛容な雰囲気を作り出す役割、言い換えれば、実践者と周囲をつなぐ役割を担える人材が必要となる。そうした「つなぎ」役もまた、地域づくりのキープレイヤーたりえるだろう。

今回は、つながりが生まれる空間には「食」が大いに活躍するという点も体感（堪能）することができた。食は誰もが必要とすることであるため、共有しやすいテーマである。地域産品やそれを使って作った商品・食事を地域づくりの「売り」とすることもさることながら、食を介したつながりを醸成することが地域づくりを前進させる点は重要だろう。例えば、前後に会食を伴う伝統行事のいかに多いことか。それは、食の共有の重要性を先人たちが知っていたからに他ならない。会食の様式は時代に合わせて変化するかもしれないが、その意義についてはこれからもつないでいく必要がある。



撮影・記録
岩崎雅史
生命環境学部准教授

昨年度の南山城村に続いて撮影メインでの参加。今年度の与謝野町バージョンでは昨年度までとは違って活躍のフィールドが異なる4名のキーパーソンからお話が聞けました。私はまちづくりのド素人ですので、昨年度までに聞いた成功例が正解と思いついていましたが、正解は1つではないことに気付いたのが今年度の大きな収穫でした。地域でのまちづくりが持続的であるためには、きれいごとだけではダメで経営面もしっかりと設計しなければならない、というのはたしかに正論です。しかしながら、このようなビジネスライクな考え方が強すぎると都会の喧騒を離れて移住を希望されるような方には息苦しく逆に足かせになる可能性があります。地域コミュニケーションにより結果的に緩やかな「ビジネスコネクト」が形成されていることにほっこりとした温かみを感じ、同時にご自身の哲学（芸術）を自然体で展開されているあり方は素直にカッコイイ！と思いました。少し大げさかもしれませんが「地域で生きる」という理想形の1つを見た気がしました。学術的には「まちづくりの正解」が他にどのようなものがあるのか？これらを数値化して分類し、地域に応じたまちづくりの最適解を提案できるようなシステムはできないか？など妄想が膨らみました。撮影者としての成果の1つはYouTubeに動画（<https://youtu.be/6tVMDZXDI2Y>）をアップしましたのでご覧いただけますとうれしいです。



モデレーター
鈴木暁子
コーディネーター

お天気にも恵まれ、怪我や病気もなく無事終了できたこと、関係者のみなさまに改めてお礼を申し上げます。みなさんが楽しそうにまちをあるき、話をして、おいしそうに会食をしていた姿が印象的でした。

以下、プログラムの担当者として、全体を振り返って改めて気づいた点です。①会食とは人同士が共鳴しあう行為であること、②丹後というエリアがひとつのまとまりとして機能しており行政区分を超えた多層的なネットワークが生まれていること、③制度や組織ありきではなく「ひとのありかた」を追求しながら関係性をつくる場づくりのデザインについて、その価値を実感できたことです。

これらは一見すると新しい動きに見えますが、いままで集落や地域コミュニティで担われてきた機能に、今日的な意味を見出したリバイバル（再活性化）とも捉えられます。もとに戻す、懐かしむのではなく、体験や相互交流によって新たな価値を見出す機会ともなりました。

「メイン会場「かや山の家」の紹介動画」です。



NEWS LETTER 33



【KIRP主催】まちづくり人材育成プログラム「2023場づくりLabo in 与謝野町」



1 場づくりLaboとは？

自治体職員、地域づくり支援者、実践者等を対象に、住民主体のまちづくりの現場を体感してもらい、ディスカッションを通じて「地域づくり」を問い直すプログラムです。

京都地域未来創造センター主催 まちづくり人材育成プログラム「場づくりLabo」とは、自治体職員、地域づくりに関わる社会人や実践者を対象に、住民主体の地域づくりの現場を体感してもらい、ディスカッションを通じて、「地域づくり」を問い直す合宿型のプログラムです。今回のフィールド先は、京都府北部にある与謝野町。農と食の価値を活かした地域づくりをテーマに、与謝野町らしい風土、地質、地形を生かした米や野菜づくり、食を通じた内外とのつながりと地域づくりの関係性について、地元の農家、料理人、ローカルベンチャーの方々と地域の話聞き、参加者同士で話し合いを行いました。

地域のキーパーソンの紹介

青木博さん・梅田優希さん（株）かや山の家運営委員会

かや山を運営を引き継いだ経緯、料理に込めた思い、人とのつながりとイベント企画、温江地区や丹後地域への愛着など、日頃、あまり言語化することがなかった、普段自身が大切にしていることを再認識することができました。



江種里榮子さん（e.g. u.代表）

オンラインでしたが、まちづくりに対する思考について話をする事ができ、参加者のみなさんと「思考の出会い」があり、楽しかったです。今回は、対面でゆっくりと語り合いましょう。

木村有紀子さん（まさ農園）

最初は、まさ農園の活動は地域づくりなのかどうか分からず、何をお話してよいか分からなかったのですが、棚田で米や野菜をつくって売ることが、人とつながり、地域づくりにつながるといことが、今回、分かりました。あれから、訪問してくださる方々に対して、温江地区の地質（蛇紋岩や水質）や地形（日照）がお米や野菜、お酒のおいしさにつながっているのですよ、と語れるようになりました。今冬にはまさ農園の軒先で焼き芋を売っていますので、お立ち寄りください。

濱田祐太さん（株）ローカルフラッグ

日々の会社経営で後回しになってしまう、自社の理念や価値について考える機会になりました。与謝野町をはじめ丹後地域ではありがたいことに応援団や協力者は増えてきていますが、プレイヤーがまだまだ足りません。みなさん、お待ちしております。

2 プログラム

フィールド学習実施の2週間前にオンライン事前学習を行いました。そして現地フィールド学習は、参加者、地域のキーパーソン、モデレーター、スタッフとともに、1泊2日の合宿型により行いました。



全体モデレーター
川勝健志
公共政策学部教授

場づくりLaboでは、私たちがまちづくりのキーパーソンと考える方々にご自身のライフストーリーや地域の人たちとの関わり、活動内容を紹介して頂いたうえで、参加者全員と対話をして頂きます。地域課題の本質を見出し、キーパーソンの経験を客観的に理解することで解決のための気づきを与えることが、そのねらいです。対話の中で参加者はまちづくりの課題をさらけ出すことによって、自らの強みと社会の現況を理解して進むべき方向と手段、新たな地域づくりを構想する手がかりが得られるのではないかと。その気づきを自らの場（地域）で実践し検証する。気づき・実行・検証を繰り返すことで地域づくりが最適化され、地域の発展に導かれるのではないかと。そんな期待感をもって取り組んでいるのが、場づくりLaboなのです。

食と農は人のつながりを生みやすい。だとすれば、農村地域で暮らす人たちの営みに、まちづくりの手がかりがあるのではないかと。そんな仮説を立ててみたことが、今回初めて与謝野町で場づくりLaboを開催させていただくことに至った理由の1つです。学びのフィールドとしてお世話になった温江地域には、Uターンしてきた若者や移住者の挑戦をキーパーソンの方々をはじめ彼らに巻き込まれた地元の人たちが時に応援隊となり、時に一緒に面白がってお節介さえてくれる寛容さがあることが印象的でした。彼らの行動は「足元から始めて固める」というものですが、その発想や人的ネットワークは「わが地域」を越えた実により広くオープンなものです。新旧ないし世代間、地域を越えたコラボレーションによって生まれる小さな成功体験の積み重ねが自然発生的に拡散し、地域づくりの原動力になることを、私自身も学ばせて頂きました。

与謝野町の概要

与謝野町を含む丹後地方は、古くから織物の里として、絹織物「丹後ちりめん」の生産地として隆盛を極めるとともに、物流の拠点としても栄えてきました。また、四季折々の植生が豊かな大江山連峰や、天橋立の内海である阿蘇海、サケが遡上する清流 野田川といった自然に恵まれた地域です。今回のフィールドワーク先である、大江山から加悦谷平野一帯は田園地帯が広がる米どころで、近年では、ビールの原材料となるホップ栽培もおこなわれ、農作物の生産も盛んです。



ねらい

- ① 地域の価値を体感する
- ② わがまちとのまちづくり・地域づくりのプロセスを比較する
- ③ 自分なりのガバナンスのビジョンを描く

日程

事前学習(オンライン)：2023年9月30日(土)
合宿プログラム：2023年10月7日(土)～10月8日(日)

会場

1日目：かや山の家（与謝野町温江区）
2日目：PUBLIC HOUSE TANGOYA（与謝野町下山田区、与謝野駅前）

参加者 14名

1日目：14名、2日目：9名
（自治体職員、地域づくり支援者、地域金融機関、デザイナー、大学教員、大学院生など）

時間	10月7日(土)	10月8日(日)
9:00	「ま」と「ま」に寄り添い、土地や風土に根ざした地域課題の「ま」と「ま」づくり	「ま」と「ま」に寄り添い、土地や風土に根ざした地域課題の「ま」と「ま」づくり
9:00	与謝野町 温江区	与謝野町 下山田区(与謝野駅前)
会場	かや山の家	PUBLIC HOUSE TANGOYA
スケジュール		
9:00		開場① PUBLIC HOUSE TANGOYA 本朝野郎のまのまのま
9:00		10:00-12:00 かつまのま
11:00		開場② 山の家 (土) ローカルフラッグ 西本健次さん (土) 山の家 山本健次さん (与謝野町)
12:00	昼食 (山の家)	昼食 (TANGOYA)
13:00	開場③ かや山の家	開場④ (下山田区)
14:00	開場⑤ まのまのま 本朝野郎さん・西本健次さん	
15:00		
16:00	開場⑥ (山の家 コーヒー)	
17:00		
18:00	夕食 (山の家 デザイン)	
20:00		

3 プログラム参加者の感想

プログラムで感じたこと、考えたことなどの感想と、プログラム終了後のアンケートから皆様の感想をお届けします。



参加者
駒寄忠大
公共政策学部准教授

今回の場づくりLaboでは、様々なかたちで地域の活性化に取り組んでおられる方たちのお話をお伺いすることができました。

プログラムを通して気づいたのは、色々なリーダーシップのかたちがあること。また、地域の活性化は、一人のスターの存在だけで成り立つものでなく、住民の地域に対する誇りや住民同士の信頼関係といったベースがあってはじめて展開していくということでした。

こうしたことは、私の関心である、公共を誰がどのように担うのか、という問いに一つの示唆を与えてくれるものでしたし、私自身の地域活動にも大いに参考となるものでした。



参加者
前川由衣
精華町職員・KIRP研究員

私は、役場職員なので、「まちづくり」と聞くと「行政として町を何とかせねば！」という気持ちになるのですが、温江地区の皆さんには、そんな気負いはなく、日々を楽しく豊かに暮らそうとする中で、地域の人が緩やかに繋がり、自然と人が集まって来ている、という印象を受けました。

ある参加者の方が、「地域の方は、自分の人生を豊かにしようとしている一個人に過ぎなくて、行政は、それに寄り添う位しかできないのでは。」と言われたのが印象的でした。



参加者
原田成至
京田辺市職員・KIRP研究員

食に対して、よく生産者の顔が見えないというマイナスな言葉を用いられませんが、今回のプログラムを通じて、作り手の背景やストーリーを知ることで、ただ美味しい食を味わうだけでなく、地域らしさというものを感じました。このストーリーを他の方にも興味をもってもらうことが地域づくりのスタートになるのだと学びました。

また、今回の体験をどう活かすのかと考えたときに、まだまだ自分の地域で知らないことが多いなと改めて感じました。まずは、地域に出て、地域の人と対話することを自分のスタートとしたいと思います。

その他の参加者の声

■ 今回のプログラムで最も良かったこと、得られた学びを教えてください。

- ・ 短い時間の中で様々な方々と対話できたこと。
- ・ 様々な立場の地域のプレイヤーの方のお話がお伺いできたこと
- ・ 一番は仲間づくりで繋いで頂いたこと。それぞれの役割の中で視点や立ち位置は違えども、目標が同じであると共感できた。
- ・ 今回聞いた話などを今までの経験や知識などと結びつけながら、自分の中で体系化できたこと。
- ・ 自分ができることをまずはやってみる所、小さな一歩を踏み出すかどうか大切だと学びました。
- ・ シビックプライドの涵養が地域振興の鍵の一つであることが理解できた。
- ・ 「まちづくり」はボランティアでは続かない。日常の実践の積み重ねが幸せそうに楽しそうであれば、地域であれ、組織であれ、自然と人が引き寄せられるということ。だからこそ、仕組みやコンセプト作りがとても大事、(例えば、ローカルフラッグのビールが売れると、地域貢献に問題解決にもなり、地域が潤う。結果として自然とまちづくりになる)。
- ・ 民間のキーパーソンや京都府立大学がまちづくり施策のパートナーであることに気づいたこと。
- ・ 大学の先生が研究や教育以外でここまで充実したイベントを実施されるのは意外でした。

■ プログラムの改善点を教えてください。

- ・ 市職員の参加者が多かったのですが、他職種の方がもう少し多ければ違った意見が出て面白そうだと思います。
- ・ 地域連携が大切な中で、官学民金の各分野からも多様なメンバーが集まればもっと素晴らしいものになると思います。